

# ことばを そっと おしひらく

—5月から7月の間に会った詩

青木由弥子

7月9日のポケット（at両国 江戸東京博物館）は、手作りの熱気がそこかしこで渦を巻き、空間そのものが生きて動いているようだった。スポークワード系朗読パフォーマンスや、テキスト系？朗読なども刺激的だったが、何より、実際に詩を書いて詩集や同人誌を創っている人達と、会って話げできたことが楽しかった。今月は、ポケットで入手した詩集や同人誌を中心に見ていきたい。

『反射熱詩集』2016。「反射熱」同人8名によるアンソロジー。白地の表紙に、繊細な銅版画風の線描と、滲みを活かしたニュアンスのある花の絵が配された、印象的な表紙が、まず目に留まった。挿画を描いたのは同人の遠海真野さんとのことだが、遠野さんの詩作品「オウ坂」が、実に面白い。読んでいくうちに、迷宮を彷徨っているような酩酊感に誘われる。

オウ坂

遠海真野

昨晚兄からメールが届いた  
自分の書いた詩を同人誌に載せて欲しいと

オウ坂が突き抜けている、と  
兄は言った  
オウ坂とは人名なのか地名なのか  
三時間ほど前から  
わたしは兄を許すことに決めた  
萎えたという理由で仕事を辞めた  
兄の立っている窓の外の空が麗しかったためだ

同時刻  
弟がホットココアをあちちと言いながら持ってきた  
四年前弟となつてから  
何かと世話を焼いてくれる弟  
背が低いので背伸びがち  
庭の花木の毛虫退治人  
こんな兄姉で申し訳ない

家出中の妹が  
いったん帰るわと帰ってきた

揉め事はだいたい彼女に集中し  
平気平気とどこかへ捨ててくる  
いったん帰ってきて  
僕の服やら父さんの印鑑やら通帳やらを持って行く  
次はいつ会えるのだろう  
オウ坂が突き抜けててすごいっぱいよ、と  
妹は言い残して出て行った

さて多分姉だが  
すれ違う人みな振り返る美女でスタイルも完璧  
そのせいで半地下の部屋から出てこない  
本物の美女は男から追われ女から憎まれ  
楽しいことなど一つもないそう  
当然  
父からは愛され  
母からは憎まれ  
生きた心地がしないそう  
それが父母より受け継いだ血のせいならば冷酷なことだ

生き物が進化の過程で目や胎盤を獲得したように  
奇妙なめぐり合わせにより  
一つ屋根の下の自分たち  
オウ坂が突き抜けていてすごいらしい  
という噂にひかれ  
久しぶりに一堂に会する

兄弟は姉の美しさにおどおどし  
あたしはぎくしゃくし  
弱視のお姉やんだけいつもどおり

しかし顔を突き合わせても  
オウ坂が人名か地名かは誰も知らず  
噂だけが一人歩きして  
各ご家庭の個々のドアを叩き  
あくびのように開けさせているのだった  
突き抜けていて  
すごいらしい  
と

午後からはかなりの雪という噂

フードを目深にかぶった姉と  
わたしの手を引いて  
兄と弟が連れて行ってくれるという  
歩道橋をのぼり  
高架下を抜け

枯れ草をかきわけ  
空を仰ぎ  
正直この二人では心もとないが  
妹がいるから大丈夫だろう  
わたしは兄の服のすそを掴み  
胸をときめかせた

降り積もる雪で白い町  
およそ五人のわたしたちはもつれもつれ  
もつれもつれ進んだ  
かをるは遅しく  
恵は頼りなく  
あゆむは優しく  
ユキはどうしようもなかった・・・  
わたしもだ

はたして

オウ坂は  
突き抜けていて

すごかった

(と、ここまでが兄の作である)

(雪で白い町と思ったけれどそれは夜明けの白々とした空で)

少し長めだが、全篇引用した。オウ坂、と綴られた時、大阪の音も重なるが、オウという音が出会いの場としての逢坂を呼び寄せる。冒頭の「兄の作品」としての設定がプロローグ、( )に閉じられた部分がエピローグ。その間の「詩」が兄の作品、なのだが・・・お気づきだろうか？語り手が、次々に変わっていくのだ。

1、2連目は、兄を持つ語り手。男女は不明。〈兄〉は氣力が萎えて仕事を辞めたのだろうか。3連目で弟は義弟であることが示される。〈兄姉〉、とあるから、この連の語り手は〈姉〉である女性か。そのつもりで次の連に移ると、〈家出中の妹〉を持つ〈僕〉が語り手として登場。次の連の〈多分姉〉として現れる女性は、絶世の美女であるがゆえに〈父からは愛され／母からは憎まれ／生きた心地がしない〉ので、〈半地下の部屋から出てこない〉なんとも複雑な家族関係が暗示される。おそらくは兄と姉ふたり、〈僕〉と妹、五人の兄弟姉妹がそろったことになる。

〈オウ坂が突き抜けていてすごいらしい／という噂にひかれ／久しぶりに一堂に会した兄弟姉妹。〈兄弟は姉の美しさにおどおどし／あたしはぎくしゃくし／弱視のお姉やんだけいつもどおり〉。後に〈およそ五人のわたしたち〉と出て来るが・・・およそ、と記される不確かさが、また新たな謎へと誘う。

ユニークなのは、〈各ご家庭の個々のドアを叩き／あくびのように開けさせているのだった／突き抜けていて／すごいらしい〉オウ坂、という言葉に呼び寄せられた、大人同士の「兄弟姉妹」が、いつのまにか〈降り積もる雪で白い町〉をゆく子供時代の〈およそ五人のわたしたち〉になっていること。大人になった兄弟姉妹が

集まって話しているうちに、いつのまにか幼い頃の記憶の中に生きている・・・そんな魔法のような一瞬を描きとったように思われるのだが、これは、兄の創作である、という。兄と弟、あるいは妹の二人・・・いや、そもそも、この兄そのものも、架空の存在かもしれない・・・。

雪で白い町の幻影が、白々と明らんでくる町の光景にスライドしていく。語り手は、〈兄〉がメールで送って来た作品（おそらく小説）を、一晩かけて読んでいたのだろう。そうして、明け方を迎えたのだ。

麻生有里の私家版の詩集『ちょうどいい猫』は、帯に見立てたツートンカラーの表紙が楽しい。編集にも工夫が凝らされ、一冊の物語のキーフレーズを抜き出してコラージュしたような、転調や飛躍の多い、それでいて背後に物語の流れを感じさせる作品を冒頭に配し、次第に余白が埋められて、〈わたし〉と〈あの人〉の危ういながら支え合う暮らし、〈ちょうどいい〉暮らしの様子がおぼろげに立ち上がって来る。巧みな編集は御夫君の手になるとのことだった。麻生の第一詩集である。集中から、もっとも惹きつけられた一篇を。

## けもの

麻生有里

奥歯に噛んだままのカタマリを  
ようやく飲みくだして  
身に覚えのない積み木を  
壊したとか壊さないとかの話で  
しばらくぶりに息を返せば  
いいのかなと思った  
父の名が太郎  
母の名が花子  
であるかのようにわたしがいて  
少しだけ似た事情の  
あのひとがいる

互いの姿には一糸たりとも  
必要としないので  
そのあたりに放り投げておく  
代わりに包む毛の深い生きものとして  
猛々しく外に吹く嵐を  
知らず知らず受けてしまって  
こわい  
ということすら解らない  
説明しよう  
それとも図解しようか  
こういうことだよ  
すらすら滑る白紙の上で  
そう  
とわたしは返事をしておく

破れるものは決まっている

未だ知らないまま引きずられ  
噛み切られた肉片が  
奥歯に残っているのだと  
危うく積まれた木製の日常の頂上から  
あかたも見下ろすかのように  
錯覚してみたい  
けれどいとも簡単におちいれるなら  
いらぬ  
必要としない  
その音はぎしぎしとさえ言わない  
今日もおちいることが  
できない理由はそれだった

父の名は  
母の名は  
なんだったろうかそして  
わたしのこともあのひとのことも  
誰も名付けようとしなかった事情を  
今は誇りに思う  
おちいれないのではない  
出られないのだわ  
外に雄々しく吹く嵐を避けて  
わたしたちは今  
互いの体毛にくるまれる  
その姿には一糸たりとも  
必要としないので  
代わりに吠え上げては  
強く  
奥歯で何かを堪え合っている

太郎と花子、のように、ごく平凡な、ごく平均的な、いわば「普通」の両親から生まれた〈わたし〉と、〈少しだけ似た事情の／あのひと〉。詩集全体を通読すると、普通であること、平均的であることに、違和感や齟齬、時には負担すら覚える二人の姿が立ち上がって来る。だからこそ、というべきか、〈猛々しく外に吹く嵐〉をやり過ごし、二人でいる時には人であることすら意識しないで済むらしい。ありのままにいられる、濃密な空間。

〈わたしのこともあのひとのことも／誰も名付けようとしなかった事情を／今は誇りに思う～わたしたちは今／互いの体毛にくるまれる／その姿には一糸たりとも／必要としないので～奥歯で何かを堪え合っている〉二人でなら堪えられる。その痛みすら甘美に感じられる、美しいフレーズが印象に残った。

美しい装幀の、薄手の私家版詩集を並べていた**友尾真魚**。メタリック光沢のある表紙に、『鞆屋の糸』という詩集名に絡むように配された赤い糸の紋様が、立体的に盛り上がっている。開くと、見返しにも赤い糸が織り込まれている。集中から表題作を全篇。

赤い糸を盗まれた

私たちは確かに  
静かに夫婦として水底に沈んでゆく

もういらなくなりましたね

鞠屋の職人は  
ぱちんぱちんとはさみを使い  
そうして私たちの赤い糸は盗まれた

せめてもの希望で  
来世で出逢うための糸の端を  
冷たい川の水で編む

赤い糸が評判の  
鞠屋の職人に見つからぬように  
ふたりの血の糸を流れに添わせて

初読では、長く寄り添った老夫婦が、最後の時を迎える様を描いているように思われる。それを、まだ二十代と思われる作者が、手売りしている！このギャップが、なんとも面白い。〈赤い糸〉は、運命の二人を出会わせるために必要な物、なのか。〈赤い糸〉には限りがあって、既に出会った二人、添い遂げた二人、には、必要ないものなのか・・・〈赤い糸〉のリサイクル？手鞠を連想させる鞠屋というイメージ、ハサミで非情にもカットしていく、無造作な動き。でも、〈赤い糸〉は、まだ必要なのだ、来世で、再び出逢うために・・・。冷たい川の流れに、〈ふたりの血の糸〉を流して、それを新たに、ひそかに編み上げていく。この、二人だけの糸を、鞠屋に盗まれてしまわないように、こっそり隠れて・・・。

このように読んでくると、おじいちゃん、おばあちゃんになっても、あの世に行ってしまうても、いつまでも一緒にいようね・・・そんな若々しい熱さを秘めた、相思相愛の詩篇であるようにも思われて来る。

詩集は、一般に¥1000～¥2000の価格帯が多いが、ポケットでは工夫を凝らした手作り、しかもワンコイン以下（！）で入手可能な小詩集に数多く出会うことができた。造本とクオリティーの高さで、既に前評判の高かった西原真奈美の『まなうら』は、真っ赤な表紙と、和模様のマスキングテープの鮮烈さが、まず目を惹きつける。（ホチキスの針は、トンカチやペンチで平らに潰しておく、もっと、良いかもしれません・・・すみません、蛇足。）斜めにカットされた見返しは黒。窓が切られていて、そこから光が漏れ出している写真が見える。めくると

まなうら  
雨の鳥  
夜の骨  
光源

と記され、一瞬「序詩」かと思いきや・・・これが1章の目次であり、扉なのだった。ビーズをつけた糸葉が綴じ込まれているが、鳥と猫の型抜きに、ステンドグラスのようにセロファンを挟んだ葉も「おまけ」に挟まれている。2章、3章の扉も、薄紙や和紙を用いた、凝った装幀。「夜の骨」で直截に御尊父を茶毘に付した折のことを記した後の、「光源」。

## 光源

西原真奈美

古びた醫院の空調が低く唸って  
忘れられた中庭の室外機が匂う

額の丸い反射鏡が  
ハレーションを起こして  
かたちの無い光の描線に  
真白く絡み取られてゆく

震える指先で  
眼球を覗かれながら  
覗き返すと  
いきなり消えるペンライト

暗転する  
私 を

此処はやはり終わりの場所  
光を捉える猫のように  
どこまでも瞳孔を細めてゆけば  
あちらとこちらが入り混じって  
（ いない ）と言う

中庭の湿った下草が  
また 雨を呼ぶ  
あなたを覚え続ける  
やわらかいあらゆる場所が  
点描になって私を描き出すから

分かつことができないままの  
欲しがる前の鼓動を  
同心円に激しく振り切る  
闇の光源を  
私の中心として

この作品1点だけを読むと、耳鼻科でよく使われる穴あきの反射鏡を付けた医師に、目の中を覗き込まれている、そんなシチュエーションも思い浮かぶ。しかし、ペンライトとは、何だろう。此岸と彼岸のあいだに連れ出されるような感覚、〈あなたを覚え続ける／やわらかいあらゆる場所〉・・・小詩集にまとめられた流れの

中で読み直せば、父への追悼詩、挽歌であることが静かに伝わって来る。父を看取る医師の手元の、ペンライト。その光源に照らされる父の目、まぶたの中・・・まなうら、に、いつのまにか西原は溶け込んで、逝く側からの視線で、この世を見返している。

やはり手作り感満載の、まるでいたずら書きのような味わいのイラストが眼を引く小冊子があった。真ん中に大きく地底国、と記されている。一見、これが詩集名のように見えるのだが、裏に返すと「※表紙文字はプロローグです」と但し書き。表紙イラストとして描かれた人物が着ているTシャツに記された文字、という趣向。正式名称『詩集・アガルタのシャンバラ』は、扉の位置に記されている。ゲームなどに用いられている名前でもあるようだが、アガルタとはアジアのどこかにあるとされた地底国、シャンバラとはチベットに伝わる理想郷、その伝承を踏まえたものだろう。集中から一篇。

## ビール

一日の仕事が終わると、セキュリティをかけて、  
外に出て月を見る  
コンビニに寄ってウイスキーを買い、バス亭で  
バスを待ちながら飲む  
それが私の夜の始まりだが、今日は珍しくビールを買った

久しぶりに飲むとビールも旨いなあ、  
と、思う  
なんだか知らないが、青春の味だな  
などと思うのだ  
私はもう青年じゃないから  
ビールなんてこんなもん、  
二度と飲まなくてよいや  
ってわけでは  
ない  
が  
じゃあ、どんなんだとか  
めんどくさいことは措いとして  
ビールが美味しい  
ビール一本は、アルコールでは、ウイスキーひと口ぶんだ  
だがそれなりに酔うものだね

ビールを飲むと  
私の二十本の触覚のうち  
なんだか切ない一本が  
どこかへ延びてゆく  
君は  
まだ生きているか  
あの夜を  
覚えているか

## 蛾兆ボルカ



それは私の触覚が探知できないことだから  
君に任せるけど  
君と私の間に横たわる、その遙かな闇に  
私の触覚が静かに触れて  
バスはまだ来ないから  
ビールが、やたらに爽やかに  
苦い

一連目。あまりにもありきたりな、何の変哲もない日常の描写に驚く。〈今日は珍しくビールを買った〉この一行が、果たして何かの伏線になりうるのか？二連目も、とぼけている。〈久しぶりに飲むとビールも旨いなあ〉当たり前だ、とツッコミを入れようとする、作者自身が〈と、思う〉と改行する。〈なんだか知らないが、青春の味だな〉これまたなんと当たり前な、と思いかけると、〈などと思うのだ〉とこれまた作者が改行してくる。既に読者の反応は織り込み済み、と言わんばかり。〈ビールなんてこんなもん、／二度と飲まなくてよいや〉旨い、と言いながら、二度と飲まない、ここに奇妙な矛盾がある。ビール（青春の味）が、いったい何を思い起こさせるのか・・・問いかけようとしたとたん、〈ってわけでは／ない／が〉とかかわられてしまう。いつものウイスキーの、ひと口ぶんのアルコールなのに、ビールも〈それなりに酔う〉それなり、とは何だろう。そもそも、なぜ、この日に限って、ビールなのか？

四連目からの急展開に目を見張った。間延びするくらい当たりの事ばかり前半に記されているがゆえに、後半の鮮烈さが増幅される。〈私の二十本の触覚のうち／なんだか切ない一本が〉あまりにも自然に、当然の如く記されているが、触覚？しかも、20本。カフカの『変身』ではないが、いつのまにか、語り手は蟲にでもなっているのか？しかも、20本もあるにもかかわらず、〈私の触覚が探知出来ないこと〉に、なんとか接触しようとしている。

〈君は／まだ生きてるか／あの夜を／覚えているか〉かつて、〈君〉と過ごした〈あの夜〉の青春の苦さ。〈やたらに爽やかに／苦い〉ビール。〈バスはまだ来ないから〉この一行が、この世からあの世に到るバスのようにも思われて来る。

ビールを飲むと始まる〈私の夜〉は、青春の苦みを思い出す時間でもある。その〈遙かな闇〉の中で、語り手は苦さを旨さとして、しかし二度と（あの苦さは）飲まなくてもよい、と感じたり感じなかったり・・・しながら、まだ来ないバスを待っている。

ポエケットで出逢った詩の話ばかりになってしまった。葛西佑也詩集『みをつくし』、横山黒鍵詩集『そして彼女はいった一風が邪魔した』も入手したのだが、どちらも内容の充実した重量級の作品なので、次回に回したい。今月は、前回も紹介した新設投稿サイトB-REVIEW (<http://breview.main.jp>) で、5月に会ったユニークな1篇と、6月に会ったインパクトある詩集の中から1篇、ご紹介する。

まずはB-REVIEW投稿作品から。ペンネーム“北”が、5月3日に投稿した作品。

## 蒼ざめし

北

我が頭蓋骨をさわりたい  
目玉がはまっていたところから  
外を覗き込んでみたい  
穏やかに昇天している無量の言魂がみえるだろう

我が墓石を前に、  
我が頭蓋骨を両腕に鎮めている  
あちらの人間も、こちらを見ている  
あちらとこちらの境界で、互いに気不味いではないか  
胡座の裡にどっしりと座り、

人目を気にせず

ああ、我が頭蓋骨を抱きしめていたい

出かけるのは深夜、我が頭蓋骨のとなりに腰かける  
星林は夜景に埋もれ、街灯りは絶景を見下ろしている  
もう、帰るところがないのである  
宙も大地もないのである  
雨風を凌ぐ、  
家に設計図はいらないのである  
あちらもこちらも、  
同じ社会構造になってしまう

ひとり静かに死んでいたいのである  
我が頭蓋骨を抱きしめ、  
ほんとうに最後までよくがんばった  
心臓も労わってやりたい（火葬してしまった  
せめて墓を建ててやりたい（心臓に名前がなかった  
今さら申し訳ないと思う  
四十九日、心臓を靖子と名づけ呼ぶことにした

\*

靖子、我が片恋の女  
あちらでは、一言の会話さえ、交わしたことがなかった  
しかし、今なら告白できる気がする

暦の境界に靴を脱ぎ  
ここから飛び降り貴女の跡を追うのだ

靖子、靖子さん

この勇氣はいったいどこから湧いてくるのか  
こちらで貴女へ伝えられなかった恋情を、

あちらで貴女に伝えること叶うであろうか・・・

そう思うと、

靖子がどきどきする

一連目、我が頭蓋骨の中に入り込んで、そこから世界を見る（見たい）という反転の願望。頭蓋の周りで〈穏やかに昇天している〉のは、生前に〈我〉が発した言葉の魂か。地上から無数の光の点が、夜空に昇っていく景が見えるようだ。

二連目、自分の墓石の前で、自分の頭蓋骨を抱いている。実に奇妙ながら、霊となった自分が遺骨を抱きしめている様を連想する。まだ墓に収められていない頭蓋骨（雨月物語などに現れる、雨ざらしになったシャレコウベのようだ）。〈あちらの人間〉のあちら、とは、彼岸か、此岸こそが〈あちら〉なのか・・・

死後の霊が自分の頭蓋骨の隣に座って、星灯りと街灯りが融け合う景を見ているという非現実の光景が、鮮やかに具体的に思い浮かぶ面白さ。～のである、の連続するリズム。〈雨風を凌ぐ、／家に設計図はいらぬのである／あちらもこちらも、／同じ社会構造になってしまう〉死後の世界に社会構造という言葉を持ち込まれると、あちらとこちら、彼岸と此岸も実は地続きのような、ちょっと居場所をずらしただけ、というような、そんな世界の中にいるような気がしてくる。

面白いのは、自分の心臓に〈靖子〉と名付けるところ。巷で話題の大森靖子へのオマージュかとも思ったのだが、作者からの返信レスによると、靖、という漢字（の字形）が、自分の頭蓋骨を抱いて立って青空を眺めているシーンに合っている、そんなイメージから選んだとのこと。作品自体は夜の話なので、創作の時にはまた別の連想が働いていて、レスを返す間に新たに作者の脳裏に浮かんだイメージなのかもしれないが、心臓に名前を付ける、という発想が実に面白い。最後に〈どきどきする〉のは、もちろん、生きて今、ここにいる作者の心臓である。

〈暦の境界に靴を脱ぎ〉この世の時間、今生の生から逃れたいという願望を、具体的な映像として示す想像力や、全体に漂うユーモア、彼岸と此岸を区分するのではなく、くるくると入れ替えてしまう視点の取り方がユニーク。

黒牛の背に白いカミキリムシが乗り、黒牛からまっすぐ（！）空に向かって伸びた黒髪をハサミでチョッキン・・・そんなインパクトのある絵が、不穏な朱赤の空模様の中に浮いている。イキのいい言葉がポンポン飛び出してくる、魚野真美の第一詩集『天牛蟲』。現実の中のささやかな景から、大真面目にデフォルメされていくことによって、そこに現れる異界の面白さ。

〈魂が燃えることをやめず／自らの血や脂を発火剤にし／浮いたまま帰って来ない奴がときたまいる～人魂を取り戻す三箇条！／いち、ひたすら歩くこと／に、一時間は耐久すること／さん、土踏まずを憂うこと／（我、昇天坂にて浮力を授からん！）〉「酩酊ユニバース」

〈何もかもに／寄り添うなんて馬鹿げている／お前ら大阪を行進しろ／何より大阪を凝視しろ／大阪は穴だらけ／そこに川が流れている／相互に埋めあうことでしか生活できない〉「OSAKAタイムトラベル」

〈少女に正面から／犀はどこにもいない／と伝えてあげなよ／そうしないと／きみ、首が落ちるよ／ごとり／あーあ／また追悼式〉「春、樂園。」

などなど、ユーモアにあふれた勢いのある言葉があちこちに転がっているのだが、ここでは（小難しくない）社会批判的な視線も匂わせる一篇を紹介したい。

## バズーカ病院

魚野真美

母の勤め先が  
病院名を公募するという。  
え、街の人から？  
いや、職場内からやねんけど。  
あたしはバズーカ病院がええと思うねん。

理事長、たいほうさんやねん。  
バズーカ病院。  
吹っ飛びそうやろ。

来月末から  
現看板は外され  
砲台はキタを標的（ターゲット）とする  
ONE ハルカス阿倍野  
TWO 新世界通天閣  
THREE グランフロント大阪

野戦病院はもちろんバズーカ病院  
命名した看護師たちは  
自らバズーカに乗り込み  
次々と発射されていった  
そしてそのまま戻ることはなかった。

看護師たちが、ビュンビュン大阪の空を突っ切っていく。そこからどこに行った  
かって？野暮なことを聞きなさんな、バズーカ砲で吹っ飛ばされるよ。職場は皆、  
戦場です。  
ではまた、来月。